紅い月

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅い月

【Ｎコード】
Ｎ５５８７Ｅ

【作者名】
チェリ↓

【あらすじ】
雨の中、傘もささずに佇んでいる美しい少女・美月に傘を貸した望。
翌日、再び望の前に現れた美月は昨日とは様子が違っていて……？
七夕の夜に望は美月から告白されるが、その内容は……。
夢……？　幻……？　それとも現実……？

―1―

―――6月・・・梅雨の時期。
シトシトと降り続ける雨の中、
ふと足を止めて空を見上げると
まんまるい月が浮かんでいた。
普通、雨の日は雲が空を覆っていて月なんて見えないのに
今日はなぜだかきれいに月が見えている。
しかもその月は紅い満月。

「きれいだな・・・。」
一人で自分のアパートへ帰っていた俺・辻口望は
誰に言うでもなくポツリとその言葉を口にした。

そして、再び歩き出そうと一歩足を前に出した時、
目の前の横断歩道の真ん中に女の子がいるのが見えた。

・・・え。

その子は俯いて立ったままじっと動かずにいた。

動けないのか・・・？

とも思ったが、どうやらそうでもないらしい。

そこにはたくさんの花束が手向けられていた。

その花束をじっと見つめているようだ。

誰か知り合いが事故にでも遭った場所なのかな？

それにしたって、ずっとあんな所にいたら危ない。

分離帯がある為、なんとか車に轢かれずに済んでいるけれど

交通量の多い道路だから大きなトラックが何台も通っているし、

みんなスピードだって出している。

俺はその横断歩道は渡らないけれど、
その女の子が気になった。
見ていて危なっかしいだけじゃなく、
俺が通っている大学の構内でよく見かけている子で
前からずっと気になっていた女の子だったからだ。

そのうち、信号が変わって横断歩道の歩行者信号が青になった。
だけど、みんなが横断歩道を渡り始める中、
彼女は一向に動こうとしなかった。

そして歩行者信号が点滅し始めた。

なんで動こうとしないんだ？

俺は彼女に駆け寄り、手を取って横断歩道から連れ出した。

すると、彼女は驚いた表情のまま俺の顔を見上げた。

「あんな所にいたら危ないよ？」

冷たい手・・・。

体が冷え切っているのか？

そのワリにはまったくどこも濡れていないのが不思議だけど。

一体、いつからあそこにいたんだ？

「・・・大丈夫？」

顔を覗き込むようにしながらそう言うと

彼女はゆっくりと頷いた。

ホントに大丈夫なのかな・・・？

家まで送って行ったほうがいいんだろうか？
それとも俺の部屋に連れて行ったほうがいいのかな？

てか、どっちもマズいか・・・。
だって別にお互い面識があるワケじゃないし。

俺の方はあるけど・・・。

「この傘、使って？」
彼女は傘も持っていなかった。
だから俺は自分が持っていた傘を彼女に差し出した。

「・・・え？・・・・でも・・・・」

「俺の部屋、すぐそこだから。」

俺はなかなか傘を受け取ろうとしない彼女の手に傘を握らせた。

「早く帰ってちゃんとお風呂で暖まらないと風邪ひくよ？

じゃーねっ！」

それだけ言って俺は走って帰った。

―――次の日。

昼からの講義に出るため、俺は昼前に部屋を出た。

昨日、彼女と出会ったあの横断歩道の前を通る時、

なんとなく気になって彼女姿を探した。

だけど彼女はいない・・・。

また彼女があそこにいたら・・・とか思ったけど

杞憂に終わった。

大学までは歩いて数分。

正門が見えてきたところで俺は足を止めた。

彼女がいたのだ・・・。

「こんにちは。」

彼女は俺の姿を見つけると小さく笑った。

「こ、こんにちは。」

俺は昨日とはまるで違う彼女の様子に少し驚いた。

「昨日はありがとう。」

彼女はきれいに畳んだ傘を俺に差し出した。
昨日、俺が彼女に貸した傘だ。

「あ、うん。」

もしかして・・・

「コレ、返してくれる為に待ってた？」
俺がそう聞くと彼女はコクンと頷いた。

「なんか・・・ごめん・・・悪い事したな。」

「ううん、私が勝手に待ってただけだし。」
彼女はにっこりと笑った。

「・・・。」

その笑顔に俺はキュンとして、何か言わなきゃ・・・

と、思いながらなかなか言葉が出てこないでいた。

「・・・それじゃ。」

彼女がそう言って立ち去ろうとした瞬間、

「あ、あのさ・・・せっかくだから昼メシでも一緒にどう？」

と、俺は無謀にも言ってしまった・・・。

「うん。」

けど、彼女は意外にもあっさりとＯＫしてくれた。

俺達二人は大学の構内にある学食に向かって歩き始めた。

ホントならここで待ってくれてたお礼に

もっとマシな所にでも連れて行きたいところだけど

バイトの給料日前だし、講義もあるから次に取っておく事にした。

まぁ・・・“次”があればだけど・・・。

それから彼女とはいろんな話をした。

名前は紅野美月ちゃん。

俺と同じ2年生で天文学部。

携帯番号とメアドの交換もした。

昨日の事はなんだか聞き辛くて聞けなかったけど、

彼女の部屋はあの横断歩道を渡った先だという事は話してくれた。

―2―

「望くんっ。」

「あ、美月ちゃん。」

二週間後、大学の構内にある図書館で

俺が課題の調べ物をしていると美月ちゃんに会った。

「ここ、いい？」

「うん。」

美月ちゃんも図書館で勉強なのか俺の向かい側の席に

荷物を置くとなにやら本を探しに行った。

そして数冊の本を抱えて戻ってきた。

全部天文学の本・・・

そっか、美月ちゃんは天文学部だっけ。

彼女とは二週間前、一緒に昼メシを食ってから仲良くなった。
“望くん”、“美月ちゃん”と呼び合えるようになった今は
構内ですれ違ったりする時も前みたいに
ただ見つめるだけじゃなくなった。
お互い笑って手を振ったりしている。
彼女の持つ雰囲気がそうさせているのか
こうして図書館で一緒に勉強するのも
なんだか自然な事になってきた。

つい二週間前に仲良くなったばかりなのにな・・・。

美月ちゃんは俺の周りにいる女の子達とはちょっと違う。
なんていうか・・・太陽と言うほど明るくはないけれど

月のような感じ。

ちょうど美月ちゃんの名前と同じ、美しい満月・・・。

美月ちゃんと出会った時に見た、あの紅い月のようだ。

「ん？・・・何？」

不意に美月ちゃんが顔をあげた。

俺が思わずじっと見惚れていたから

視線を感じたらしい。

「え？・・・あぁ、いや・・・なんでも・・・」

「？」

慌てて視線を外すと美月ちゃんは小首を傾げた。

「美月ちゃん、明後日って空いてる？」

図書館を一緒に出た後、俺は明後日の7月7日に行われる『七夕祭』に

誘おうと美月ちゃんに予定を聞いた。

「うん、空いてるよ？」

「じゃあさ、『七夕祭』一緒に行かない？」

「うんっ！私も望くんと一緒に行きたいと思ってたの！」

彼女は嬉しそうに返事をしてくれた。

やった・・・っ！

俺は心の中で叫んだ。

ちなみに『七夕祭』とは、毎年大学内で行われる
もう一つの学園祭みたいなモノ。

学園祭は学園祭で秋にあるけれど、
大きく違うのは一日だけのお祭りで、
『七夕祭』が行われる二週間前から構内の数箇所に
設けられた笹に願い事を書いた短冊を吊るし、
それを『七夕祭』の夜、キャンプファイアみたいに
みんなで囲んで燃やす事。

「望くんはもう短冊書いた？」

「うん、書いたよ。」

先日、サークルの連中と一緒にふざけながら書いた。

けど、俺が短冊に書いた事は真剣な願い事だったりなんかする。

「なんて書いたの？」

美月ちゃんが興味深そうに俺の顔を覗き込んだ。

「内緒。」

俺がニヤッと笑ってそう答えると「ケチー。」と

笑いながら口を尖らせた。

だって、俺が短冊に書いた願い事は美月ちゃんとの事だから。

「『七夕祭』の時に言うよ。」

俺はその『七夕祭』の夜に思い切って彼女に告白しようと思っていた。

「うん。」

まさか俺がそんな事を考えているとは思っていない美月ちゃんは
小さく笑いながら頷いた。

――――二日後。
午前中、サークルの模擬店を手伝っていた俺は
午後から美月ちゃんと合流した。

一緒にいろんな模擬店を廻って、いっぱい一緒に笑った。

楽しい時間はあっという間に過ぎて
気がつけばもう夕焼け空が広がっていた。

そして太陽が沈んで月が見え始めた頃、
たくさんの短冊が吊るされた笹が

次々と燃やされ始めた。

紅い月・・・

あの時と同じ紅い月・・・

「きれいな月だね・・・。」

笹を燃やしている炎が空に浮かんだ夕月まで燃やしているかのように

紅く染めている。

それがとてもきれいで思わずその言葉が出た。

「・・・うん・・・。」

俺の隣にいる美月ちゃんも空を見上げ、

紅い月を眺めていた。

だけど、その横顔はどこかとても哀しそうで・・・

苦しそうで・・・・。

美月ちゃん・・・・？

どうしてそんな哀しそうな顔をしているんだ・・・・？

―3―

「望くん・・・好きだよ・・・。」

俺が美月ちゃんをじっと見つめていると

彼女は不意に俺の目を見つめ、口を開いた。

美月ちゃん・・・

「・・・最後にどうしても私の気持ちを

望くんに伝えたかったの・・・。」

「え・・・？」

最後・・・？

「どういう意味・・・？」

「私・・・本当はね、もうここに居ちゃいけない存在なんだ・・・。
」

彼女の言葉の意味がいまいちわからない。

「望くんが私に傘を貸してくれた日の前の日にね・・・私、死んだの。」

「・・・・。」

美月ちゃん・・・何を言ってるんだ・・・？

「大学に行こうとして、あの横断歩道渡ってたらね、
信号無視で突っ込んできたトラックに撥ねられて・・・
即死だったらしくて・・・。

だから、私もまさか自分が“死んだ”なんて信じられなくて
すぐに成仏できなかったみたい。」

「美月ちゃん・・・？」

「それでね、事故現場に手向けられてたたくさんの花束をじっと見てたら
なんだか動けなくなっちゃって・・・そこへ望くんが現れたの。」

「・・・そんな・・・嘘だろ・・・？」

「望くんがいなかったら、私きっとずっとあそこから動けないでいた。」

「美月ちゃん・・・っ。」

やめろよっ！・・・そんな冗談・・・っ！

「私ね、大学に入った頃から望くんの事がずっと気になってて・・・
だから、望くんが私の手を引いて横断歩道から連れ出してくれた時は
すごく嬉しかった・・・。
誰も私の事に気付いてくれなかったのに、望くんだけが気付いてくれた・・・。」

彼女が話している内容を頭の中では理解しようしながら
心の中では“嘘だ、嘘だ。”と拒絶している。

「・・・でも・・・もう、行かなきゃ・・・
今まで、ありがとう・・・。短い間だったけど、すごく楽しかった。」
美月ちゃんはそう言うとまた哀しそうな目で俺をじっと見つめた。

「行くって・・・どこに・・・？」

なんとなく答えはわかっている。

今、彼女が話した内容が全部本当なら・・・

「・・・ごめんね・・・。」

美月ちゃんは細い腕を俺の首に少しだけ回し、

そっと唇を重ねてきた。

「・・・っ！？」

驚いたけど、彼女から離れる気もない俺は、

美月ちゃんが離れるのを待った。

「明日・・・目が覚めたらもう私の事は忘れてる・・・。」

美月ちゃんは目に涙を浮かべながら言った。

「・・・？」

明日、目が覚めたら・・・？

「今のキス・・・望くんの中の私の記憶・・・吸い取ったの。」

さっきの“ごめんね。”はそういう意味だったのか・・・？

「美月ちゃん・・・っ。」

少し俯いて踵を返そうとした美月ちゃんを俺は慌てて引き止めた。

思わず手首を掴んで引き寄せると涙を流していた。

「俺だって・・・ずっと美月ちゃんの事が好きだった・・・。」

「え・・・・？」

「・・・だから、行くなよ・・・・。」

“行くなよ。”なんて言ったところで、どうしようもない・・・・

俺にも・・・彼女にも・・・

そして誰にも・・・・。

「無理だよ・・・行かなきゃ・・・・。」

彼女がそう答える事はわかっていた。

だったら・・・せめて・・・

「・・・じゃあ、美月ちゃんが吸い取った記憶・・・返して・・・・。」

半ば強引に美月ちゃんの肩を抱いてキスをすると

咄嗟に離れようと彼女はもがいた。

だけど、もがいたところできつく抱きしめているから

離れられるワケがない。

やがて、段々と彼女の体が冷たくなって行くのを感じた。

抱きしめる腕の力を強くしても、

美月ちゃんの体の感触がなくなっていく・・・

重ねているはずの唇の感触も・・・

・・・それと同時に俺の意識も少しずつ薄れていった・・・。

そして・・・

次に俺が目を開けると・・・

自分の部屋のベッドの上だった・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5587e/

紅い月

2010年12月16日14時41分発行